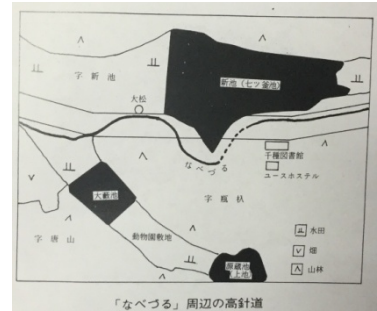


なべづる

名古屋市千種区千種本町1丁目で生まれ高見町に移った。名古屋で就職し、新池町、清住町、そして星ヶ丘に住み続けている。千種区を西から東へと移動してきたことになる。千種区東部に住んで40年近くにも。名古屋都市センターでたまたま小林元『千種村物語—名古屋東部の古道と町なみ』



1984年を手にした。古き時代の「千種」が語られ、時間軸と空間軸から、まち歩きの手帳を仕入れることができた。まずは東山・新池近くの話（上の地図）から。

動植物園の開園に伴う道路の拡張、舗装も公園前までで、それより東方の「一ノ嶺坂」と呼ばれた新池への坂道は、昭和20年代（1950ごろ）まで石ころだらけの田舎道でした。道の南側は山で、北側は新池の堤下の谷で水田になっていました。道路の北脇に一むらの松が茂っており、これは今でも残っています。新池の堤の南脇まで登りつめると道は南東方に大きくカーブします。ユースホステルへ行く道がそれで、千種図書館の前あたりで新道の位置に再び戻っていました。この大きな屈曲の原因は、新池が南へ張り出していたためですが、道の曲がり工合が鍋のつるによく似ているので、地元の人たちはそこを「なべづる」と呼んでいました。道幅は小型のバスがやっと通れるほどで、両側には大きな松がうっそうと茂って昼間でも薄暗く、よく追はぎが出ました。

新池は江戸時代「七ッ釜池」と呼ばれていました。元禄十年（1697）二代藩主光友が大曾根に別邸を造営した時、庭園の泉水のために猫洞池から水を引きましたが、その替地として「七ッ釜池」が造られたのです。したがってこの池の名は『寛文覚書』には載っておらず、文字どおり「新池」だったのです。堤の長さは95間（約170メートル）高さは5間（約9メートル）ほどあり、猫洞池の堤に比べて長さは短いものの、高さでははるかにしのいでいました。昭和の初期まで池は今よりずっと広く、東山工業高校の東方までありました。高校のある場所は戦後埋め立てられて、「東山スタジアム」という野球場が造られました。開場記念に東京六大学のOB戦が行われ、多くの観客を集めました。もともと湿地で地盤がよくないので、その後しばらく放置されたままです。

@写真のように、松のあたりから「なべづる」と思われるところを歩いた。



(2017年5月14日)